

## 教職課程の英語学に関する一考察

佐々木 隆

### プロローグ

筆者はこれまでに大学の英語教育と教職課程に関して様々な考察を行って来たが、今回はその考察をさらに深めたい。<sup>(1)</sup> 学生時代は文学部英米文学科で学び、現在では大学の教職課程の科目を担当している。現在文部科学省では教職課程の見直しが行われており、平成31年度に大きな改革が予定されているが、まずは現行の教職課程の教育課程に関する考察を行いたい。

### 1 区分「英語学」の法令上の位置付け

現在の教育職員免許法施行規則第4条別表によれば、英語の教員養成における「教科に関する科目」は「英語学」「英米文学」「英語コミュニケーション」「異文化理解」の4区分がある。

筆者は『英語教育の行方』(2011)の中で「英語学」について次のようにまとめた。

区分「英語学」は英語の構造や歴史を扱うことになる。英語を言語学的に理解することとなる。従ってこの分野では言語としての英語を学ぶこととなる。英語学、英語音声学、英語史、英語文法などがこの分野で配置されることとなろう。

言語学として英語を学ぶことにより、World Englishesという考え方やwritingにおける指導でもその背景を広める意味でも必要な区分である。国語の教員がいわゆる古文から現代語への変遷を理解するのと同様である。<sup>(2)</sup>

文部科学省『平成27年度英語教員の英語力・指導力強化のための調査

研究』においては事例として英語学については以下のようにその取扱い内容について取り上げている。

### ○英語学

英語の音声、単語、文法、言語習得過程等の基礎についての理解を深めるなどを目的とした科目・英語の音声、語彙、表現、文法及び第二言語習得理論等<sup>(3)</sup>

文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業 平成 27 年度報告書』（東京学芸大学、2016）によれば、英語教員に求められるものとして『『英語圏』と『非英語圏』の垣根を取り除き、グローバル人材の育成を目指す』<sup>(4)</sup> ことが求められていると言う。

英語学にはグローバル人材の育成という観点を考慮に入れると、World Englishes は必要な項目となろう。2016 年 11 月吉日付で文部科学省委託事業『中・高等学校英語教員養成コア・カリキュラム（試案）に関するアンケートご回答のご依頼』なる文書が届き、そのアンケートの中に以下のような箇所があった。大項目と小項目の表題だけを紹介しておきたい。

#### 「英語学」

##### ◆目標

中学校及び高等学校における英語の授業に資する英語学的知見を身に付ける。

英語学に関する知見の中で、特に中・高等学校での英語教育に資するものについて、専門的な知識を得ることを目標とする。

##### ◆学習項目

- (1) 英語の音声の仕組み
- (2) 英語教育に関わる英文法
- (3) 英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語<sup>(5)</sup>

筆者は文学部英米文学科の出身で教職課程を履修し、英語科の教員免許状を取得したが、当時の科目には「英語学概論」「英語音声学」「英語史」が独立して半期科目として設置され、これ以外に英文法の授業をはじめ、4技能に関する科目が多数配置されていた。

## 2 英語学で学ぶべき内容

教職課程で必要な区分「英語学」に該当科目として「英語学」又は「英語学概論」を当てた場合、どのような内容が含まれる必要があるだろうか。前述の「学習項目」の3つの内容について以下のように整理することができる。

### (1) 英語の音声の仕組み

英語音声学、音韻論

### (2) 英語教育に関わる英文法

英文法（学習英文法、生成文法、意味論、形態論、語用論、文体論等）

### (3) 英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語

英語史、World Englishes

各分野を1つずつ独立した科目すれば、「英語音声学」「英文法」「英語史」とすることもできるだろう。また、上記(1)と(3)を「英語学概論」、(2)を「英文法」とすることも可能であろう。学問体系と科目の設定は各大学による教職課程の教育課程の編成の問題となる。また、昨今特に国際共通語としての英語、第二言語としての英語を考えると、第二言語習得(second language acquisition/SLA)研究も無視することはできない。当然のことながら、SLA研究は英語科教育法といった指導を中心に扱う科目の中で取り扱われることになるが、「国際共通語としての英語」と共にその研究内容について言語研究史といったような取扱いと

して若干含めることも必要性があるかもしれない。SLA 研究は国際共通語としての英語を考えれば、当然、この中である程度言及することもよいだろう。

### 3 英語学の教科書と教材

英語学を研究する立場ではなく、英語学を教職課程の学生に教授する立場として考えた場合、どこまで、何を教授すべきかは授業の組み立て上もかなり慎重に考えなければならない。また、配置科目数とも大いに関係してくる。「英語学概論」「英語音声学」「英語史」「英文法」がそれぞれ独立科目として設置されている場合もあれば、「英語学概論」「英文法」のみ設置されている場合もある。本稿では後者の場合を想定して、教職課程の「英語学概論」でどのような内容を取り上げるべきかを論じるものとする。

ここで一つの目安として大学英語教育学会監修『英語教育学体系』（全13巻、大修館書店 2010年2月～2011年7月）を紹介しておきたい。その13巻は以下の通りである。

- 第1巻 大学英語教育学—その方向性とその諸分野
- 第2巻 英語教育政策—世界の言語教育政策論をめぐって
- 第3巻 英語教育と文化—異文化間コミュニケーション能力の養成
- 第4巻 21世紀のESP—新しいESP理論の構築と実践
- 第5巻 第二言語習得—言語習得理論から見た第二言語習得
- 第6巻 成長する英語学習者—学習者要因と自律学習
- 第7巻 英語教師の成長—求められる専門性
- 第8巻 英語研究と英語教育—ことばの研究を教育に活かす
- 第9巻 リスニングとスピーキングの理論と実践—効果的な授業をめざして
- 第10巻 リーディングとライティングの理論と実践—英語を主体的

に「読む」・「書く」

第11巻 英語授業デザイン—学習空間づくりの教授法と実践

第12巻 英語教育におけるメディア利用—CALLからNBLTまで

第13巻 テスティングと評価—4技能の測定から大学入試まで

英語教育学という枠組みがあるが、教職課程の英語・教科に関する科目の4区分がすべて網羅されている。特にここで取り扱うのが「英語学」というから、第8巻の内容をさらに見ておきたい。「第I部 音声・文法研究」「第II部 語彙辞書研究」「第III部 文学研究」とある。第I部及び第II部の章立てを見ておきたい。

#### 第I部 音声・文法研究

第1章 音声学・音韻論と発音指導

第2章 教育・学習英文法の内容と指導法の改善

第3章 生成文法と構文指導

第4章 意味論・語用論・文体論と読解指導

第5章 英語史研究とその大学英語教育への応用

第6章 関連性理論

第7章 認知言語学—メタファー

#### 第II部 語彙辞書研究

第8章 学習者コーパス—英語習得プロセスと語彙指導

第9章 辞書と辞書学

第10章 辞書学と辞書指導

第II部は全体的に英語科教育法で取り扱うべき内容となるため、「第I部 音声・文法研究」が「英語学概論」の内容として注目すべきであろう。学生への指導等については英語科教育法などで扱う内容となることは当然のことである。

現在、英語学に関する書籍、教科書となりうるものはどのようなものがあるのだろうか。特に半期 15 回で授業を完結することを考えると、12 章から 15 章で編成されている教科書等が理想的と言える。現実的には学生の負担も考えると教科書の定価も気になるところだ。具体的なものを時系列で紹介しておきたい。

安井稔監修『英語学概論』（現代の英語学シリーズ 1）開拓社、1987 年 11 月、定価：2,700 円（税込）

- 第 1 章 英語の現況
- 第 2 章 英語の系譜関係
- 第 3 章 時代区分と各時期の特色
- 第 4 章 つづり字
- 第 5 章 音声
- 第 6 章 語彙
- 第 7 章 語源
- 第 8 章 統語論
- 第 9 章 意味論
- 第 10 章 情報構造
- 第 11 章 語用論
- 第 12 章 アメリカ英語

高見健一「英語学・言語学」（研究社出版編集部編『大学生の英語学習ハンドブック』研究社、1999 年 3 月）、定価：2,600 円＋税

- 1 英語学・言語学とはどのような学問か？
- 2 研究への糸口
- 3 英語学・言語学の各分野
- 4 文献紹介
  - (1) 音声学・音韻論
  - (2) 形態論

- (3) 統語論
- (4) 意味論
- (5) 語用論
- (6) 認知言語学
- (7) 英語史
- (8) 言語類型論

安藤貞雄・澤田治美編『英語学入門』開拓社、定価：2001年11月、  
2,592円（税込）

- 第1章 英語学とは何か
- 第2章 言語とは何か
- 第3章 英語のフォニックス—綴り字と発音
- 第4章 音声学・音韻論
- 第5章 形態論
- 第6章 統語論
- 第7章 意味論
- 第8章 語用論
- 第9章 情報構造
- 第10章 日英語の比較

八木克正『新英語学概論』英宝社、2007年2月、定価：2,400円＋税

- 第1部 英語の歴史と現状
  - 第I章 英語前史
  - 第II章 英語の歴史
  - 第III章 ブリテン島の英語から世界の英語へ
- 第2部 言語研究の発展
  - 第I章 規範から科学
  - 第II章 歴史主義から構造主義
  - 第III章 言語能力の解明としての言語学

- 第IV章 認知と言語
- 第V章 文を超えた文法
- 第VI章 コーパス言語学
- 第VII章 日本英語研究の伝統
- 第3部 現代英語の意味と構造
  - 第I章 現代英語の文法（1）一文と文を構成する諸要素
  - 第II章 現代英語の文法（2）一品詞とその機能
  - 第III章 現代英語の音声と音韻
  - 第IV章 語彙・イディオム・成句表現と辞書
  - 第V章 語用論的情報の諸相
- 第4部 人と言語
  - 第I章 人はいかにして言語を獲得するのか
  - 第II章 人はいかにして言語を処理するか—心理言語学と神経言語学

高橋勝忠『英語学基礎講義』現代図書、2011年3月、定価：1420円  
+税

- 英語史 1 英語はどこから来たの？
- 英語史 2 デーン人とノルマン人の攻撃
- 言語習得 3 人間の頭の中に普遍文法がある。
- 統語論 4 文の生成過程とは？
- 統語論 5 助動詞の構造
- 統語論 6 文の要素が移動する？
- 音韻論 7 Smog はどのように出来たの？
- 形態論 8 ゴジラはゴリラと鯨の混成語。
- 形態論 9 ライスカレーとカレーライスの違い
- 形態論 10 京都女子大学は京都・女子大学か京都女子・大学のどっち？
- 意味論 11 自動詞と他動詞の違いは何？



- 意味論 12 机を「押した」と「押し出した」の違いは何?  
語用論 13 英語ではとうとう試験に落ちたと言えないのは何故?  
語用論 14 「行き来する」が go and come とならず come and go  
となるのは何故?

唐須教光『英語と文化—英語学エッセイ—』慶應義塾大学出版会、2007

年6月、定価：2,592円（税込）

- 第1章 言語の発達と意味  
第2章 語彙の創造性  
第3章 文の生成と構造的意味  
第4章 社会言語学と意味  
第5章 言語人類学と意味  
第6章 テクストの意味  
第7章 英語の今と英語教育の明日

高田治美・吉村満知子・松本知子・山路順子『英語学概論』佛教大学

通信教育部、2008年3月、定価：1,619円（税込）

- 第1章 言語研究の研究史・英語の歴史  
第2章 音声学・音韻論  
第3章 形態論  
第4章 統語論—機能主義  
第5章 意味論  
第6章 語用論  
第7章 英語の多様性  
第8章 言葉と社会  
第9章 日英対照研究  
第10章 英語教育

三原健一・高見健一編『日英対照 英語学の基礎』くろしお出版、2013年11月、1,944円（税込）

- 第1章 音韻論
- 第2章 形態論
- 第3章 統語論生成文法
- 第4章 統語論 機能的構文論
- 第5章 語彙意味論
- 第6章 認知意味論
- 第7章 語用論

井上逸兵『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』慶應義塾大学出版会、2015年4月、定価：2700円＋税

- 第1章 英語と英語学の背景
- 第2章 英語の変遷
- 第3章 英語の多様化とグローバル化—世界の英語、国際語としての英語、グローバル英語、そして日本の英語
- 第4章 現代英語学・言語学の潮流
- 第5章 英語の音声
- 第6章 英語の語彙（形態論）
- 第7章 英語の文法（統語論）
- 第8章 英語の意味（意味論）
- 第9章 指示の語用論
- 第10章 コミュニケーションの語用論
- 第11章 ポライトネス
- 第12章 相互行為の社会言語学
- 第13章 談話分析
- 第14章 社会言語学

龍城正明編『英語学パースペクティブ』南雲堂、2015年11月、定価：

3200 円＋税

- 第 1 章 英語学への誘い—英語について知っていますか—
- 第 2 章 英語とはどんな言語か
- 第 3 章 英語学の分野
- 第 4 章 英語の発達（1）—揺籃期、古代英語から中世英語—
- 第 5 章 英語の発達（2）—近代英語から現代英語へ—
- 第 6 章 音声学
- 第 7 章 音韻論
- 第 8 章 形態論
- 第 9 章 統語論（1）—伝統文法とアメリカ構造主義言語学—
- 第 10 章 統語論（2）—生成文法—
- 第 11 章 意味論
- 第 12 章 語用論
- 第 13 章 言語と認知
- 第 14 章 世界語としての英語の変種
- 第 15 章 日英語対照研究

平賀正子『ベーシック新しい英語学概論』ひつじ書房、2016 年 1 月、  
定価：1700 円＋税

- 第 1 章 英語学の「新しい」概論
- 第 2 章 ささまざまな英語
- 第 3 章 母語英語の特徴（イギリス英語、オーストラリア英語）
- 第 4 章 母語英語の特徴（アメリカ英語、カナダ英語）
- 第 5 章 英語と社会的属性
- 第 6 章 英語の発話行為
- 第 7 章 英語のポリライトネスと談話分析
- 第 8 章 英語文化とコミュニケーション・スタイル
- 第 9 章 英語の非言語コミュニケーション
- 第 10 章 語彙からみる英語らしさ

第 11 章 文法からみる英語らしさ

第 12 章 音韻からみえる英語らしさ

中山捷編『名著に学ぶこれからの英語教育と教授法』開拓社、2016  
年 11 月、定価：2900 円＋税

I 序論

II 外山正一著『英語教授法 附正則文部省英語読本』

III 岡倉由三郎著『英語教育』

IV オットー・イエスペルセン著『外国語教授法』

V ヘンリー・スウィート著『言語の実際的研究』

VI 独自の教授法をもつこと：あとがきに代えて

以上、12 冊の本からその目次を掲載した。この目次は英語学で教えるべき内容の現われであり、授業計画として考えた場合にはシラバスの項目にも匹敵することになる。

上記で取り上げたもののうち、井上逸兵『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』（慶應義塾大学出版会、2015 年 4 月）と龍城正明編『英語学パースペクティヴ』（南雲堂、2015 年 11 月）の 2 冊は特に示唆に富むものが多い。授業回数が 15 回ということを考えても、理想的である。教科書の値段が 2500 円を超えている点はやや気になる。

平賀正子『ベーシック新しい英語学概論』（ひつじ書房、2016 年 1 月）は英語史の観点が若干少なく、国際共通語としての英語の視点は母語英語の特徴としてイギリス英語、オーストラリア英語、アメリカ英語、カナダ英語として含まれている。全体が 12 章であるため、1 章が授業 1 回分に相当するとすれば、2 から 3 回分が教授者の独自性を発揮するところとなると、1700 円という値段から見ても魅力のある教科書である。

「英語学概論」という科目を半期 15 回の授業を行うとした場合には、どのような授業計画が理想なのであろうか。教職課程の「英語学概論」とした場合には、（1）英語の音声の仕組み、（2）英語教育に関わる英

文法、(3) 英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語が中心ならなければならない。実際の指導法については英語科教育法で取り扱うことにあり、「英文法」は別に科目が設置されることを考えると、(1) 英語の音声の仕組み、(2) 英文法の歴史、(3) 英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語が取り扱われていることが重要である。

#### 4 英語学と現場での英語教育

中学・高等学校の英語教育で実際に英語学はどのような役割を担うのであろうか。英語学は中学生や高校生を対象とした授業ではどのような観点が生かされていくのであろうか。

##### (1) 英語の音声の仕組み

発音指導やリーディングの指導では理論的な背景として教員が英語音声学の知識があることが望まれる。実際には Repeat after me.による活動があるため、実際に教員の発音等が重要な要素であることは言うまでもないことだ。また、英語教員は授業時には AV 機器を活用することはもちろんのこと、モデルリーディングは欠かせないところだ。

##### (2) 英語教育に関わる英文法

読解や英作文ではこの分野は必須である。特に高校英語では語彙数も多くなることや様々な表現が要求されることを考えると、英語学の講義というよりは、単独で英文法を扱う授業が編成されることが望ましい。中学・高等学校の英語教育では学習指導要領があることから、いわゆる学習英文法(学校英文法)があるため、このあたりを教科法や指導法を連動しながら、理解しておく必要がある。英語教員として英文法を理解していることは重要なことであるが、中学や高校での教育現場はどこまで教えるかは別の問題である。

### (3) 英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語

World Englishes という考え方が主流の現在、単語の綴り、発音等、アメリカ英語やイギリス英語では異なることは周知の通りである。文法においてもその相違がある。現在日本は 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、その準備に追われている。日本に大量に押し寄せて来るであろう外国人とのコミュニケーションは国際共通語の英語となる。日本国内で様々な地域から来日する外国人が話す English as a second language (ESL)、English as a foreign language (EFL)、ここに日本人が話す EFL が加わり、コミュニケーションを取るることとなる。

発音等にコンプレックスを持つ日本人にとって国際共通語としての英語が EFL であることを中学生や高校生が知り、そこから English as international language (EIL)を目指していることを知ることは学習上重要な位置付けである。英語を公用語・准公用語としている国は 60 を超え、さらに世界に公表されている科学論文の 3 分の 2 以上は英語によると言う。<sup>(6)</sup>

高校や大学での授業では生徒・学生が辞書等を活用して長文の読解や英作文等にあたることもある。このような場合、辞書がどのような役割を果たすのか、辞書の有効な活用方法などを教授者が生徒・学生に示せるかも重要である。生徒・学生が自ら行う学習活動を広げるには辞書の活用は不可欠であるからだ。予習や復習といった学習活動では辞書の果たす役割は大きいと言わざるを得ない。

## 5 英語学を強く意識する時

筆者がこれまで中学校、高等学校、大学での教養英語を担当している時に英語学の必要性を強く意識したことは以下の 5 点である。これは教員として英語という言語の文化背景や語彙に関するものである。

## (1) モデルリーディングや発音指導を行う場合

最近ではAV機器の発達により今では音声機能のある電子辞書は珍しくない。しかし、どうしたらそのような発音ができるかを理解させるために、具体的な説明や口の中で、舌がどのような動きをしているのか、実際に発音させながら、指導する際には、専門用語は使用しないまでも、教員がこれを理解しているか、いないかは指導方法においても大きな差が生じるのではないだろうか。

また、ひとつひとつの英単語としての発音が上手な生徒・学生であっても、read aloudになるときこちない英語となる例は散見される。これには単語のアクセントに拘りすぎ、英文としてのイントネーションがなくなってしまう、カタカナを読んでいるような事態となることがよくある。英語の場合には発音も重要であるが、英文としてのイントネーション、さらにはリズム感が重要であることは、speakingなどの技能と連動するところである。

## (2) 語彙論

語彙に関する事項や文法に関する事項では特に英語学の重要性を認識させられることが多い。ここでは語彙に関する内容だけを取り上げることとする。

筆者がまだ学生のころ ride という動詞は「(またがって) 乗る」を表す動詞として、主に「馬に乗る」という意味で習った。しかし、日常生活で「馬に乗る」という行為はかなり限られた人しか行わない行為である。現在の辞書ではバス、電車でも ride on, ride in などと表現して使用することができる。当時の辞書でもバス、電車でも ride on, ride in することが記載されていたかもしれない。しかし、いわゆる教科書レベルの英語については、「電車に乗る」を ride on a train と表記すれば×という時代であった。今、そのような指導をすれば、英語教員として?ということになる。日本語もそうであるが、言語は時代と共に変容していくものである。また、「身体障害者」

に当たる英語についても時代により大きく変化している。最近では交通機関の座席付近に日英語で表記されることも多くなっている。当初は **physically handicapped person** として表現されていたが、現在では **physical disability, disabled person** と表現されることが多い。しかし、この表現でさえもすでに古くなっている。最近の高校英語の教科書では **challenged** という表現で「身体障害者」として採用しているものもある。本来であれば、**active challenged** としたところだが。現在では、**active challenged, active challenger, physical challenged** 等で表現している。残念ながら、日本の公共交通機関ではこうした表現を採用しているものを筆者はまだ目にしていない。

こうしたことは社会の動きと連動しているが、少なくとも辞書に掲載される場合にはすでに認知されているということになり、英英辞書の活用は特に教員にとっては必要なこととなる。

### (3) 形態論

単語を解説する場合によく行われるのは派生語や類義語、反意語などの紹介である。接頭辞などはこれを知っているだけでも単語の意味が推測ができるようになる。**dis-, ex-, im-**などはその典型である。系統的に事例を出しながら説明ができれば、語彙力アップにつながり、わからない単語が出てきても、ある程度推測しながら英文を読むことができるようになって来る。

### (4) 英文の構造・意味

英文を理解するためには英語の構造を理解することが重要である。これが中学・高等学校の英文指導者として意識したいものは中井延美「言語研究の要素を導入した大学英語教育」(2013)が「5 言語研究の要素をいかに導入するか」で取り上げられた「ウナギ文」「名詞句の形式特性」「コピュラ文」が代表的であろう。中井は資格取得に特化された技能学習とは別にと前置きしているが、次の指摘は大学の英語教育に携わる者として同感である。



今の大学英語教育に求められるものは、学生が将来さまざまな形で英語を使用する場合に、その「土台」となり得る要素を習得させることである。そのような「土台づくり」には、さまざまな形で言語研究の様を導入することが可能である。英語の仕組みと働き、母語である日本語との比較、ことばと文化の関わりなど、大学英語教育にはさまざまな分野からエッセンスを取り入れることができよう。(7)

特に **writing** の英文指導をする際には「ウナギ文」の問題は発生する。また、日本語ではしばしば省略される主語の問題から、英語にする際に主語と動詞の問題は根深いものがある。こうした問題は英語科教育法といった実際の指導に関わる教職に関する専門科目との強い連動がある。

#### (5) 辞典

紙媒体辞典と電子辞典、オンライン辞典等の問題点については拙著『英語教育の行方』(2011)の「第6章 英語辞典の行方 電子辞書と i-Pad の普及」で触れ、最近の学生の英語辞典の活用については拙著「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」(2017)の「2 英語指導の方法」において触れた。ここで触れておきたいのは学校指定の辞書を設定している場合である。昔はよく学校指定の辞書というものがあり、生徒はみな同じ辞書を持っているということがあった。このような場合には指導者は辞書を教科書代わりに使用できるという利点がある。しかし、それぞれの持つ辞書の特性について生徒は鈍感になってしまう。当然、収録語数や辞書編纂の方針などにより辞書にも特徴があり、例文も異なっている。特に辞書の活用が積極的になる高校や大学ではこの辞書の活用による **reading** や **writing** に大きな影響が出る場合がある。

拙著「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」(2017)でも

述べたが、学生のほとんどが紙媒体辞書ではなく、電子辞書を活用している。<sup>(8)</sup> こうした状況は大学の教員だけではなく、世間一般の流れともいえるだろう。教員でさえも教室に持ち込む辞書は電子辞書の場合が多いのではないだろうか。

スマートフォン内蔵の辞書では本来辞書の持っている語彙の歴史を知ることはできない。電子辞書でもこれはほとんど変わらない。紙媒体辞書の学習辞典以上のもの、あるいはこれを電子化したものであれば、語彙から幅広い知識を得ることができるだろう。また、英英辞典の活用を行えば、前述の *challenged* に代表されるように新しい考え方をいち早く知ることが出来る。もちろん、現在はインターネットの活用によりこうした情報をキャッチすることはできるかもしれない。しかし、紙媒体辞書の見出し語あるいは項目に掲載されることはその語彙が定着していることの指標になる。

## エピローグ

言語を専門とする学部での科目としての英語学と教職課程の英語学とは同じ英語学であっても、科目のシラバスとして同じ内容である必要はない。むしろ、教職課程における英語学では、(1) 英語の音声の仕組み、(2) 英語教育に関わる英文法、(3) 英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語の3項目の内容をバランスよく学ぶ必要がある。英語の音声については、ネイティブスピーカーがすべて「話す」技能を教えられるわけではなく、日本人教員でも発音指導はその基礎の習得では有効である。また、英文法では「読む」「書く」技能については重要な役割を果たすこととなる。英文の構造を知ることが、英文読解や英作文では必須なことであるからだ。英語の歴史は *World Englishes* を考える上でも重要なことであり、現在のように海外旅行が気軽にできる時代になると、英米以外の英語圏を訪れることもあるだろう。また、第二言語としての英語を通して会話をする機会も増えてくることもまた事実だ。例えば、

日本語が話せないドイツ人やポーランド人とドイツ語やポーランド語が話せない日本人でも英語を通して会話することが可能である。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控えて、政府による様々な整備が進んでいる。英語学は理論的なものとして考えられ、その内容も堅いものが多いが、中学・高校の現場での英語教員の養成を行う教職課程では、言語学の専門家を養成するのではなく、英語学の素養を供えた英語教員を養成することが求められていると考えることができる。その意味では英語の構造等を理解していることは当然のこととして、国際共通語としての英語の見識を深めることが英語学に求められるのではないだろうか。

## 注

(1) 筆者はこれまで単著として、『教職課程と英語教育』（イーコン、2006年5月）、『今後の教職課程と英語教育』（イーコン、2007年5月）、『新しい教職課程と英語教育』（イーコン、2009年4月）、『英語教育の行方』（イーコン、2011年5月）、『大学教育の行方』（武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2016年8月）を発表してきた。論文とても最近では「教員免許状更新講習と英語教材研究」（『武蔵野教育研究』第3巻第2号、武蔵野教育研究会、2016年2月）、「英語教育の現状の報告—授業の実践例から—」（『武蔵野教育研究』第3巻第4号、武蔵野教育研究会、2016年2月）を発表している。

(2) 佐々木隆『英語教育の行方』、p.100.

(3) 「平成27年度英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究」（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362173\\_01.pdf#search='%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81+%E6%95%99%E8%81%B7%E8%AA%B2%E7%A8%8B+%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E5%AD%A6'](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2015/09/29/1362173_01.pdf#search='%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81+%E6%95%99%E8%81%B7%E8%AA%B2%E7%A8%8B+%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E5%AD%A6')) (2016年12月8日アクセス)

- (4) 文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業 平成 27 年度報告書』(東京学芸大学、2016 年 3 月)、p.215.  
([http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/wp-content/uploads/2016/03/h27all.pdf#search='%E3%80%8C%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E6%95%99%E5%93%A1%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E5%8A%9B%E3%83%BB%E6%8C%87%E5%B0%8E%E5%8A%9B%E5%BC%B7%E5%8C%96%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E3%80%8D+%E3%82%B3%E3%82%A2%E3%82%AB%E3%83%AA%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%A0'](http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/wp-content/uploads/2016/03/h27all.pdf#search='%E3%80%8C%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E6%95%99%E5%93%A1%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E5%8A%9B%E3%83%BB%E6%8C%87%E5%B0%8E%E5%8A%9B%E5%BC%B7%E5%8C%96%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E7%A0%94%E7%A9%B6%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E3%80%8D+%E3%82%B3%E3%82%A2%E3%82%AB%E3%83%AA%E3%82%AD%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%A0))(2016 年 12 月 8 日アクセス)
- (5) 文部科学省委託事業「中・高等学校英語教員養成コア・カリキュラム(試案)に関するアンケートご回答のご依頼」及び「中・高等学校教員養成 コア・カリキュラム ③コア・カリキュラム(試案)解説教科に関する科目【20 単位以上】」(事業統括・初等コア・カリキュラム統括：粕谷恭子(東京学芸大学)、中等コア・カリキュラム統括：馬場哲生(東京学芸大学)、2016 年 11 月吉日)、p.228.
- (6) 米山朝二『新編英語教育指導法事典』(研究社、2011 年 8 月)、p.111.
- (7) 中井延美「言語研究の要素を導入した大学英語教育」(『異文化の諸相』第 34 号、日本英語文化学会、2013 年 12 月)、pp.16-17.
- (8) 佐々木隆「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」(『武蔵野教育研究』第 3 巻第 4 号、武蔵野教育研究会、2017 年 2 月)、p.10.

【キーワード】 教職課程、英語学、ESL、EFL、EIL

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

武蔵野教育研究 第3巻第5号

2017年3月1日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目2番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室